

分担研究報告書

食品を介したダイオキシン類等の人体への影響の把握と その治療法の開発等に関する研究

分担研究者 石橋達朗 九州大学大学院医学研究院眼科学分野 教授

研究要旨 平成 26 年度油症患者の眼症状を追跡調査した。

A . 研究目的

研究の目的は、油症患者の眼所見の把握および治療法の確立である。したがって、患者の眼症状を把握し、その症状、苦痛を除くことに関する研究である。

B . 研究方法

平成 26 年度の油症検診が下記の通り行われた。

8 月 27 日久留米会場・受診者数 41 名(うち患者 25 名・未認定者 16 名) 8 月 30 日福岡会場・受診者 71 名(うち患者 58 名・未認定者 13 名) 9 月 3 日北九州会場・受診者 43 名(うち患者 34 名・未認定者 9 名) 9 月 6 日福岡会場・受診者 65 名(うち患者 48 名・未認定者 17 名) 9 月 11 日北九州会場・受診者 35 名(うち患者 32 名・未認定者 3 名)。受診者合計は 255 名(うち患者 197 名・未認定者 58 名)であった。

眼科的所見として、眼脂過多、眼瞼浮腫、眼瞼結膜色素沈着、瞼板腺嚢胞形成、瞼板腺チーズ様分泌物圧出の 5 項目を検討した。

C . 研究結果

今年の受診者は 255 名であり、前年度よりも 21 名少なかった。

自覚症状では眼脂過多を訴えるものが多かったが、その程度は軽く、油症の影響とは考えにくかった。他覚所見として慢性期の油症患者において診断的価値が高い眼症状である眼瞼結膜色素沈着と瞼板腺チーズ様分泌物は観察できなかった。

D・E . 考察・結論

受診者の高齢化が進み臨床所見は少なくなっている。また、油症患者の眼科領域における臨床所見は徐々に軽くなっているが、今後の慎重な経過観察が必要である。さらに油症との直接の関係はないが、白内障の手術を受けた受診者が多く見られた。これは受診者の高齢化が主な原因と思われる。

F . 研究発表

- 1 . 論文発表 なし
- 2 . 学会発表 なし

G . 知的財産権の出願・登録状況

- 1 . 特許取得 なし
- 2 . 実用新案登録 なし
- 3 . その他 なし